印刷技術からみた日本語文献の歴史 [1] [2]
THE HISTORY OF JAPANESE BOOKS FROM THE PERSPECTIVE OF PRINTING TECHNIQUE

白井　純[3]

Abstract: There is a remarkably unique feature in the history of the Japanese printing technique.

In the West, the invention of movable type printing pioneered by Johannes Gutenberg in mid-15th century changed the social position of books fundamentally and led to the decline of conventional manuscripts and woodblock printing. However, imported Western and Korean movable type printing techniques in Japan declined within half a century; the age of woodblock printing had returned. Japanese movable type printing increased in the first half of the 19th century, and woodblock printing disappeared in the Meiji period. This differs from West, in that the rise and fall of this technique of printing meant that the establishment of the technique did not take hold in Japan until substantially later than in the west.

Another notable feature is that woodblock printing and movable type printing coexisted for some time. In Japan, it was not unusual to print the same texts by woodblock printing and movable type printing concurrently around the same period. This means that there was a unique culture utilizing the advantages and differences of both these printing techniques.

Based on these factors, there are two salient features of Japanese printing history that have been discussed.

1. Why did movable type printing not become established quickly in Japan?

The technical cost of making the movable types was onerous because there are many Kanji (Chinese characters) and Kana (Japanese syllabary characters including variants of hentaigana and continuous notation of remmen-tai) in Japanese. Moreover, simple and efficient printing orthography did not prevail because the traditional Japanese Kana writing used the complicated

1 Article received 24 June 2019 and accepted 21 September 2019.

2 本稿は、第12回ブラジル日本研究国際学会の講演に基づいている。
This paper is based on the lecture presented in the XII International Congress on Japanese Studies in Brazil.
本研究はJSPS科研費JP17H02341、JP18K00608の助成を受けたものである。
This work was supported by JSPS KAKENHI Grant Numbers JP17H02341, JP18K00608.

3 Mestre; Professor Associado da Hiroshima University, Hiroshima, Japão; jshira@hiroshima-u.ac.jp (ORCID iD https://orcid.org/0000-0003-0076-4118).

and inefficient writing systems of *hentaigana* and *remmen-tai*. Movable type printing did not become established because woodblock printing was much superior in reproducing and mass-producing handwritten manuscripts of these styles.
2. Why did the period of coexistence between woodblock printing and the movable type printing continue for so long?

Woodblock printing was the mainstream method in the Edo period, but movable type printing could use movable types repeatedly for small number of copies efficiently. In general, moveable type-printed books were of a lower quality, worse than woodblock printing and were used by people who did not see this as an issue. Therefore, publishers utilized the advantages of the movable type, while the unique culture of woodblock printing prospered alongside movable type printing.

The question of printing technique is not only a technical matter but also a linguistic that is closely dependent on Japanese characters, Japanese writing system, and Japanese culture.
Keywords: History of publishing culture; Movable type printing technology; Woodblock printing; Manuscripts; Japanese historical books

1.　日本と西洋の印刷技術の歴史

1.1　日本と西洋の相違

日本の印刷技術の歴史には、西洋にはない顕著な特徴がある（Table. 1）。

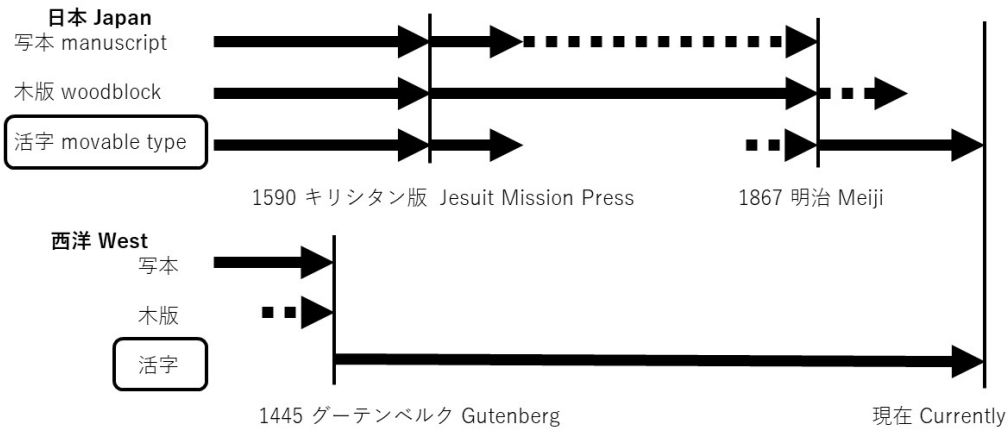


Table. 1　日本と西洋の印刷の歴史

Japanese and European printing history

西洋では、「人類の最も偉大な発明」といわれる15世紀半ばのグーテンベルクによる活字印刷術の発明が書物のあり方を根本的に変え、従来の写本

や木版が急速に衰えた。それに対し日本では、16世紀末に西洋や朝鮮半島から伝来した活字印刷術が半世紀ほどで廃れ、木版の時代に回帰している。日本の活字版は19世紀に再び増加し始めるが、木版を駆逐するのは明治時代に入ってからであり、西洋に比べて活字印刷術の定着が大きく遅れている。

もう一つの特徴として注目すべきは、日本では木版と活字版が共存する時代がしばらく続いたことである。この時代は、同一の内容を木版と活字版の両方で出版することも珍しくないが、そこには木版と活字版がもつ利点をうまく利用した個性的な印刷文化の存在が認められる。

本稿は、以下に示す日本の印刷史の特徴について結論を提示する。

1. なぜ日本で活字印刷術がすぐに定着しなかったのか
2. なぜ木版と活字版が共存する時代が続いたのか

これらの理由を明らかにすることで、印刷技術の問題が単なる技術的課題でなく、日本語の文字と表記様式、日本文化の特徴に強く依存する言語学的課題でもあることが理解できるだろう。

1.2　日本の印刷技術の歴史

1.2.1 木版の時代

日本には、紙の印刷物として世界最古（8世紀後半）と言われる『百万塔陀羅尼』（Figure. 1）がある。

文字を彫った木版もしくは鋳造した金属版を用い、文字面を上にして置いて墨を付け、紙を被せて裏面から擦って印刷する方式である。但し、陀羅尼の本文は単純な呪文であるため繰り返しが多く、それを大きな一つの印章として作り、押印によって制作したとする説もあり、それであれば印刷とは言えない。

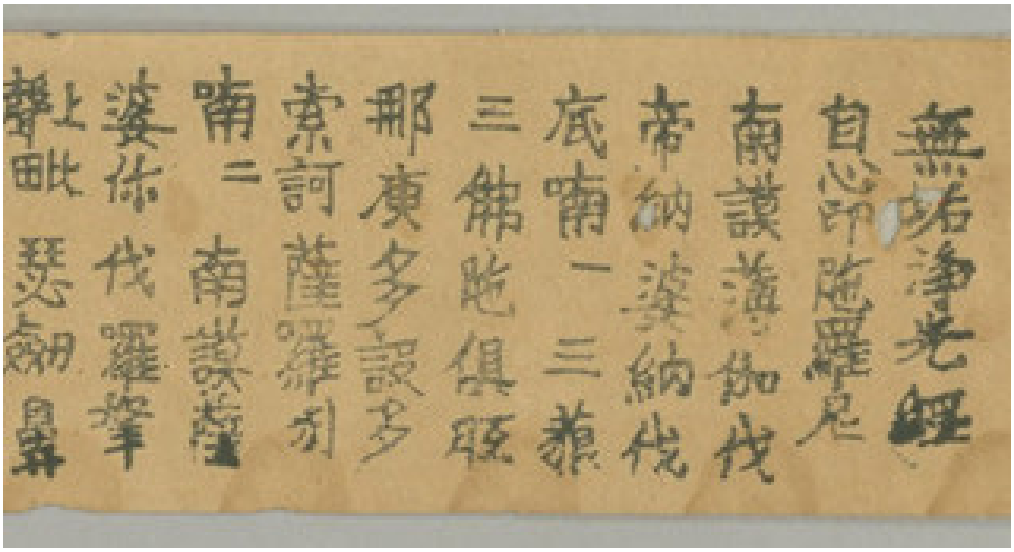


Figure. 1　百万塔陀羅尼（木版本）　Hyakumantō Darani (woodblock)

本格的な木版印刷は平安時代以降に現れる。春日版（Figure.　2）は平安時代後半から鎌倉時代にかけての奈良の興福寺を中心とする寺院の出版、高野版は鎌倉時代中期以降の高野山を中心とする出版で、漢字漢文の仏教書が中心である。五山版は鎌倉時代末期から室町時代にかけて京都や鎌倉の五山（有力な寺院）で出版され、仏教書だけでなく儒教の経典や漢詩文の注釈書などの文芸にも印刷の対象を拡大するが、やはり表記は漢字漢文であり、仮名は全く印刷されない。この時代、仮名はすべて書写されるもので、代表的な例に『元永本古今和歌集』（1120筆写）、『青表紙本源氏物語』（13世紀前半筆写）などがある。

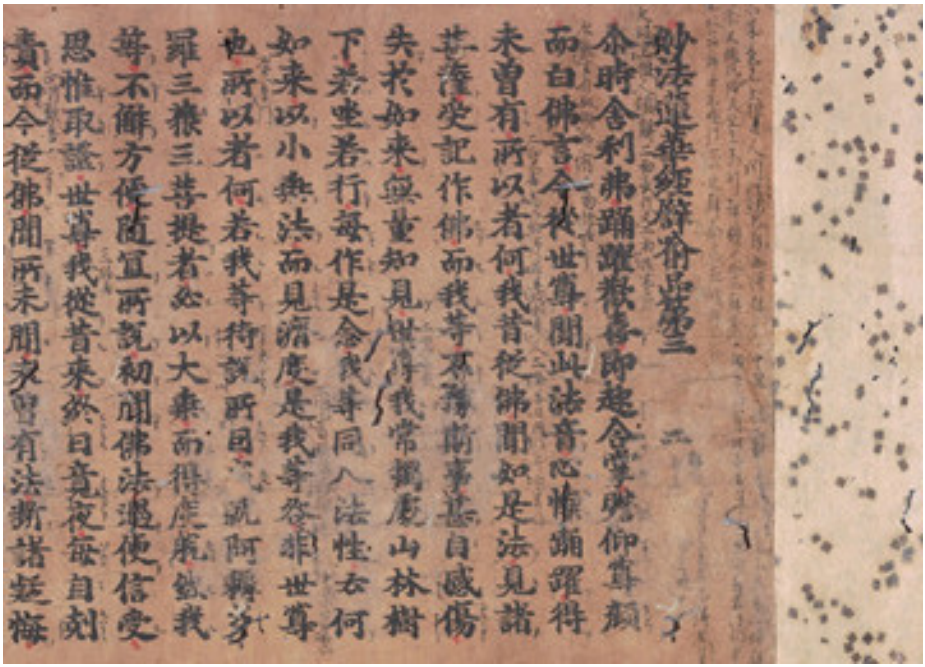


Figure. 2　春日版（木版本）　Kasugaban (woodblock)

室町時代中期以降は寺院だけでなく地域の権力者や有力者による出版も活発になるが、印刷対象はすべて漢文（漢字表記）に限られている。

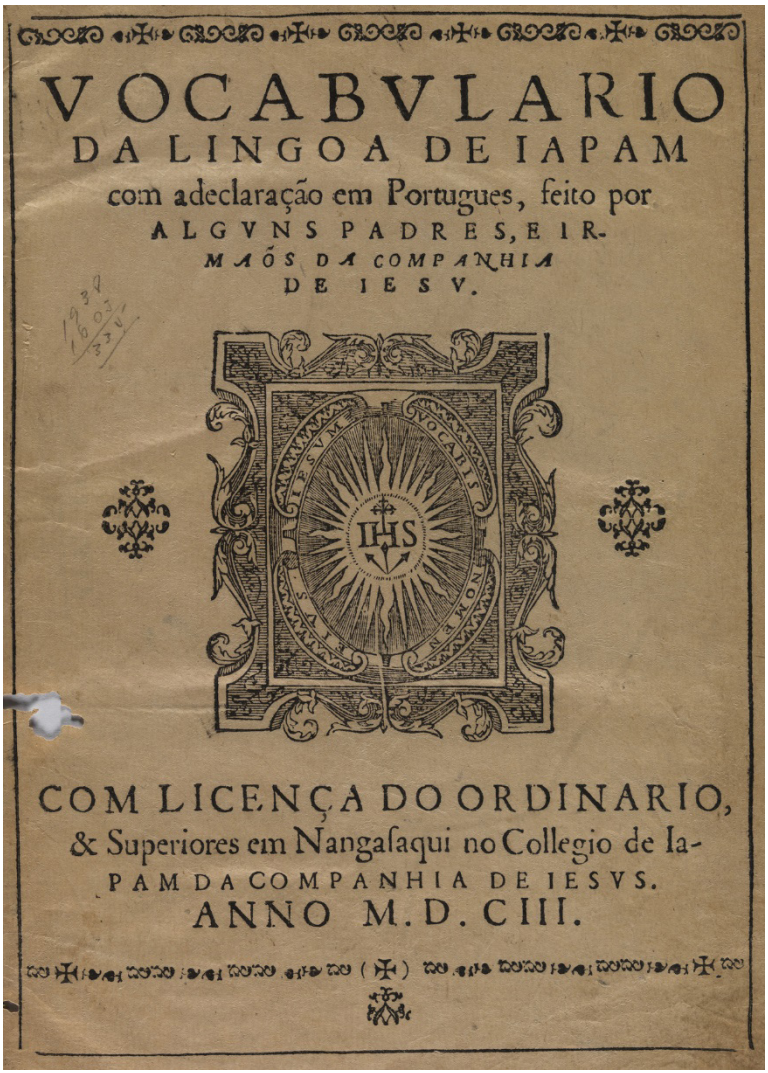
1.2.2 活字印刷術到来の時代

室町時代末期に、ほぼ同時に朝鮮半島と西洋から活字印刷術が到来する。

西洋式の活字印刷術はキリスト教の宣教師であるイエズス会士ヴァリニャーノによる天正遣欧使節の派遣事業により西洋から持ち帰った活字（ローマ字活字、仮名活字）とプレス式印刷機によるキリシタン版の出版である。

日本国内での出版は1590年頃に開始され、キリスト教禁教の圧力によって1613年頃には国内における活動を停止するが、現存する30点あまりのキリシタン版には、辞書として『日葡辞書』（Figure.　3）（1603-04刊）、文法書として『日本大文典』、宗教書として『どちりなきりしたん』、『ヒイデスの導師』、文学書として『イソップ物語』、『平家物語』などがあり、印刷する文字も極初期の片仮名、三千字余りの漢字、豊富な変体仮名や連綿を含む仮名などがあり、従来の日本の漢字中心の印刷物とは特徴が全く異なる。木版を全く考慮しなかったのは当時の西洋における活字印刷の流行を反映したためだが、西洋式の活字印刷術の文字はアルファベットが中心で、漢

字や仮名への対応はイエズス会が東アジア地域で直面し、試行錯誤の末に解決した課題であった。


VOCABVLARIO
DA LINGOA DE IAPAM
com adeclaração em Portugues, feito por
ALGVNS PADRES, E IR-
MAÓS DA COMPANHIA
DE IESV.

COM LICENÇA DO ORDINARIO,
& Superiores em Nangasaqui no Collegio de Ia-
PAM DA COMPANHIA DE IESVS.
ANNO M.D.CIII.

Figure. 3　日葡辞書（活字本）　Vocabulário da Língua do Japão (movable type)

朝鮮式の銅活字を用いた活字印刷術は豊臣秀吉による朝鮮出兵（文禄の役：1592年）の戦利品である銅活字により始まった。後陽成天皇による『文禄勅版』（現存しない）はこの活字を用いたとされ、続く『錦繍段』『勧学

文』（1597刊）は新たに制作した木活字で朝鮮式の活字印刷術によって出版されたとされてきた（跋文に、この印刷技術は朝鮮半島から発生した、とくに問題となることはないので、この技術によって複製して出版する（此法出朝鮮、甚無不便、因茲模写此書）、とある）が、近年は日本の活字印刷術にキリシタン版の影響を指摘する意見もある。翌年にも『日本書紀』『四書』『古文孝経』（Figure. 4）（1599刊）などが出版されており、多くの漢字文献を出版している。徳川家康による伏見版（木活字）、駿河版（銅活字）もこれに刺激された事業だが、木版の時代と同じく、これらはすべて漢文である。

Figure. 4　古文孝経（活字本）　Kobun kōkyō (movable type)

1.2.3 古活字版の時代

西洋式、朝鮮式の活字印刷術に刺激され、古活字版の時代がやってくる。写本や木版も引き続き生産されるが、京都の商人である角倉了以、

芸術家の本阿弥光悦という二人により出版された嵯峨本は、『伊勢物語』（Figure. 5）（1608刊）、『徒然草』、『方丈記』という日本の古典文学を変体仮名と連綿に対応した美しい木活字で印刷した点に特徴がある。

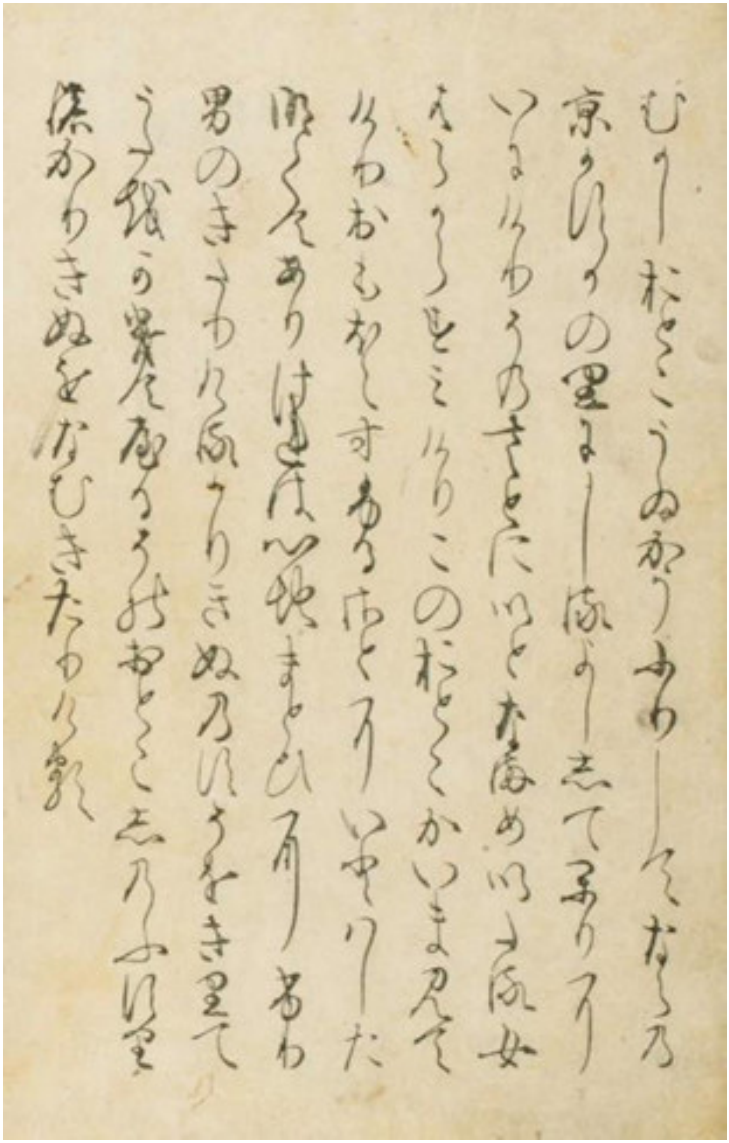


Figure. 5　嵯峨本伊勢物語（活字本）

The Tale of Ise, Sagabon (movable type)

これ以降、活字版だけでなく木版印刷でも日本の古典文学を出版することが多くなるが、木版よりも難易度が高いと思われる活字版において仮名の印刷がより早く行われたことは興味深い。この時代は活字印刷術を日本語に適用させる工夫が行われた時期であり、山田・伊東（2012）によれば、烏丸本『徒然草』にはキリシタン版の影響があった可能性があるという。

木版印刷は用紙に手書きされた版下を版木に貼り付けて彫刻するが、活字により印刷された用紙を版下に利用した覆刻整版がみられたのもこの時代である。

1.2.4 木版時代の継続

古活字版は半世紀ほどで終わり、再び写本と木版の時代に回帰する。これは、活字印刷術の発明が瞬く間に拡大し、それまでの写本や木版を駆逐していった西洋の印刷史とは全く異なる展開である。古活字版の時代にも写本や木版は廃れなかったため、活字印刷術が定着しなかったということになる。

この理由はいくつかあるが、主に、文字の種類が多い漢字や仮名を使用する日本語表記への対応が難しかったこと、毛筆を用いた筆写の特徴を重視する書道の文化に適応できなかったこと、読者層の拡大に伴い漢字に振り仮名が必要となり版面が複雑化したこと、印刷後に解版するため増刷ができないこと、版木の所有に基づく出版権管理の文化に対応できなかったことなどである。但し、西洋では増刷や出版権は問題になっていないのだから、活字版だから対応できないとは考えにくい。主要な理由は、日本語の文字や表記様式、写本を尊重する文化への対応が難しいことにあったとみるべきだろう。

1.2.5 近世木活字版の位置づけ

近世後期から末期にかけて、活字版が再び現れる。すべて木活字であり、古活字版に比べて品質が劣ることに特徴がある。写本や木版が主流であることに変わりは無く、活字版はそれに対して簡素に素早く出版するために用いられた。この時代は江戸幕府の出版統制により木版の出版には許可が必要な時代だが、活字版はその対象外であったことも、木版と活字版が平行して生産された理由である。

1.2.6 近代以降

近代になって、本格的に活字版の時代がやってくる。以後は活字版が写本や木版を圧倒し、本の体裁も洋装が増えてゆくが、古典文学（例えば和歌集）では引き続き木版を用い、装丁も和装であるなど、伝統文化が廃れるには長い時間がかかっている。

近代初期の活字版には変体仮名や連綿という写本的特徴が引き継がれるものの、次第に少なくなり、仮名は一文字毎に印刷されるようになる。その変化は書写の世界にも及び、文字を切り離して書くことが一般化する。近世には書写の再現としての印刷物だったものが、逆に書写が印刷物を真似るようになったのである。

1.3　西洋の印刷技術と印刷対象

西洋の印刷術の歴史は日本に比べて比較的単純である。中世には写本の生産が中心で、これは修道院の収入源の一つでもあったが、14世紀には木版印刷も現れている。しかし15世紀半ばのグーテンベルクによる金属活字印刷術（Figure. 6）の発明は短い期間でヨーロッパ各地に拡大して、ラテン語だけでなく各国語の出版も活発になり、写本や木版は一気に衰えた。この急激な変化は、西洋の言語の表記と活字印刷術との相性の良さに依存しており、そのことは、日本で活字印刷術の定着にかなりの時間を要したことと対照的である。

PROLOGVS

Figure. 6　グーテンベルク42行聖書（活字本）

42-line Bible, Gutenberg (movable type)

2.　何を印刷するのか

ここまでに紹介した日本の印刷の歴史をみれば、活字版が印刷される以前の中世までは、木版で印刷される対象が中国から伝来した仏典と漢籍、およびその注釈書に限られることに気づく。これらがすべて漢文であることが印刷対象の選別にあっては重要だったようにもみえるが、漢文であっても国書（日本で編集された書物）である『日本書記』（720年成立）は慶長4（1599）年の慶長勅版、『古事記』（712年成立）も寛永21（1644）年が最も早い印刷であり、漢文であれば何でも印刷するという姿勢ではなかった。日本独自の仮名を含む文献も古活字版の時代以降にならなければ印刷されないが、当然ながら仮名を含む日本語文は国書に限られる。したがって、国書を印刷しないことが、日本の印刷文化の常識であった。

古活字版の衝撃は新しい印刷技術だけでなく、印刷する対象についての意識改革をもたらしたことにある。古活字版に先行するキリシタン版の前期国字本『どちりいなきりしたん』（Figure. 7）（1591刊）と『ばうちずもの授けやう』は、連綿活字こそ少ないが変体仮名に対応した仮名活字を多く用いた印刷物であり、その意義は日本で最も古い金属活字印刷であるというにとどまらず、仮名を印刷したという点にある。日本の古活字版で本格的に仮名を印刷した最も古い例は『延寿撮要』（1599刊）であり、キリシタン版よりも遅れている。

仮名の印刷が外国人宣教師によって実行されたのは、宣教のために読み易い日本語文の量産が必要だったという現実的な目的によるが、このことは同時に、書物とは金属活字で印刷されるものだという、西洋の印刷物に対する認識の強固さを象徴する出来事でもあった。

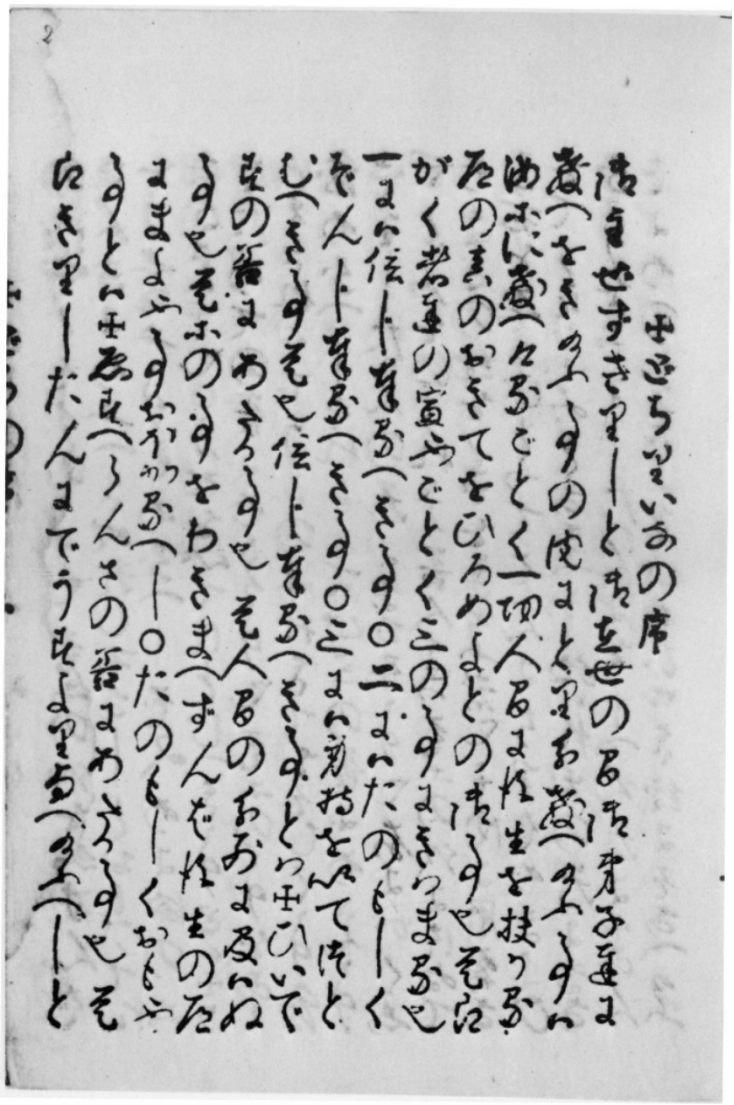


Figure. 7　どちりいなきりしたん（活字）

Doctrina Christiana (movable type)

3.　印刷による写本の再現

日本の古典文学は毛筆による書写によって伝承されたが、写本の宿命として本文の誤写や異同を生じ易い。また、仮に本文が同一であり、正しい仮

名遣いに配慮したとしても、変体仮名の選択や連綿の切れ続きまで同一の内容が再生産されることはない。

嵯峨本は写本の再現を意図したと言われるが、その理由は、意図的に一部の活字を入れ替え、変体仮名や文字の形を変えた部分異植字版が多いことによる。

鈴木（2006）によれば、国立国会図書館本と近畿大学本は基本的に同一の印刷物だが、ごく一部の活字だけ異なるという（Figure. 8a, 8b）。嵯峨本は豪華本であり、効率よりも技術的関心と美術的価値を優先した出版物だが、日本の筆写本に不可欠な、世界に一つしかない一点物としての価値を再現するため、意図的に一部の活字を入れ替えたのである。このことは印刷の効率性を全く無視しているが、同一版面の量産を特徴とする木版では原則として不可能であるから、そこに活字本の利点を見出したのだろう。

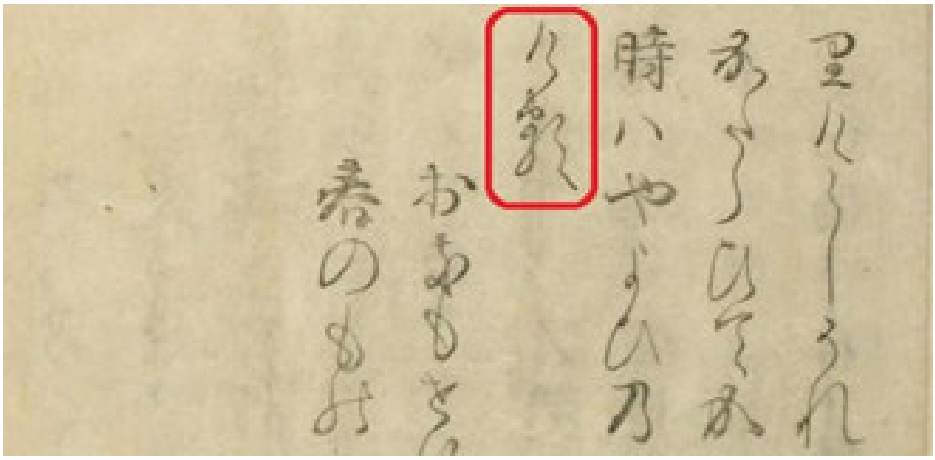


Figure. 8a　国会本『伊勢物語　上』「ける＝介類」

The Tale of Ise, National Diet Library (movable type)

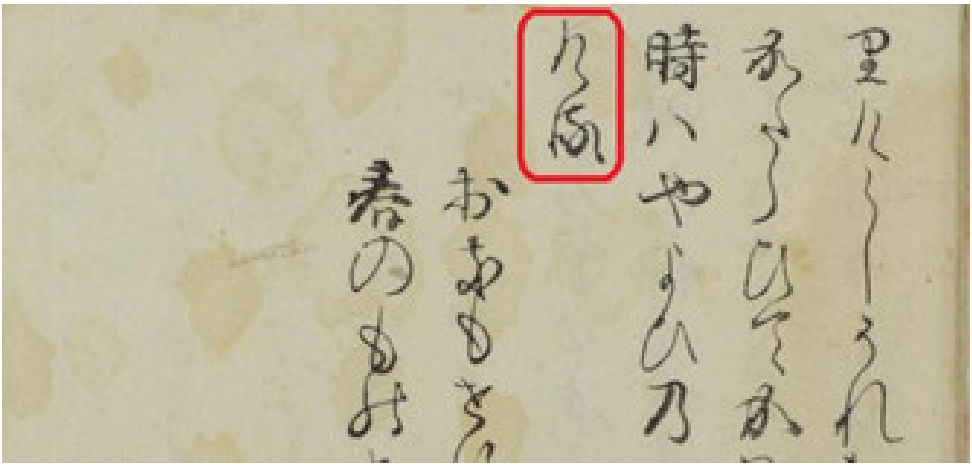


Figure. 8b　近畿大学本『伊勢物語　上』の「ける＝介流」

The Tale of Ise, Kindai University (movable type)

木版は版下となる手書きの写本を印刷によって複製し量産する技術である。そのため、多様性を特徴とする写本に近い姿を繰り返し再現するには適しており、そのことは近世以降の商業的大量出版に必要なことでもあったが、個別性という別の芸術的価値は失われる。印刷による写本の再現は、何を再現するのかという点において、木版と活字版の双方にそれぞれの優位性がある。

4.　正書法による表記の統一と活字印刷

4.1　必要となる活字の数と種類

西洋における活字印刷術の急激な拡大の背景には、様々な書物の普及と流通を求める社会的需要があったことはもちろんだが、ラテン語をはじめとするアルファベットを用いる言語が、活字印刷術にとって相性が良かったためなのは疑いない（Table. 2）。

	ラテン語 Latin	日本語 Japanese	
文字 character	アルファベット Alphabet	漢字 Kanji	平仮名 Hiragana
書体の区別 Distinction of style	あり Yes	あり Yes	なし No
大文字・小文字の区別 Distinction of capital / lower characters	あり Yes	なし No	なし No
字種数 Number of characters	少ない Small	極めて多い Extra large	少ない Small
異体字 Variant of characters	極めて少ない Extra small	極めて多い Extra large	多い（変体仮名） Large (Hentaigana)
連続表記 Continuous notation	少ない（合字） Small (ligature)	なし No	多い（連綿） Large (Remmen-tai)

Table. 2　ラテンアルファベット、漢字、平仮名の特徴

Features of Latin alphabet, Kanji, Hiragana

ラテンアルファベットは書体の違いや大文字・小文字の区別を持つが、基本となる字種数は二十数種と極めて少なく、異体字の区別も殆ど無いため、符号を入れたとしても活字として区別すべき文字種がとても少ない。金属活字は原則として一つの父型と母型から量産されるので、文字種の少なさは有利に働く。文字種によって使用頻度に大きな違いがあるため字種毎の活字在庫数の調整は必要だが（英語では、qやzの使用頻度は母音字の1/100以下ともいう）、このことは量産により克服できるため、ラテンアルファベットの印刷には木版印刷よりも活字印刷の効率が良いのは明らかである。

漢字には明朝体・行草体の区別があるものの同時には共存せず、大文字と小文字の区別もないが、基本となる字種数は、漢文であれば数千字種に及ぶ。字種毎の活字数についても、頻用される常用的漢字がある一方であまり

使われない漢字があり、しかも固有名詞に必要となる特殊な漢字が文脈によって集中的に利用されるなど予測が著しく困難で、活字の在庫に無駄を生じて生産効率が悪くなりやすい。

例えば、キリシタン版『ぎやどぺかどる』は漢字と仮名を含むキリシタン版屈指の印刷物で、筆者の調査によれば1967種類の活字を用い、延べ使用回数の多い活字は、仮名「の」7823回、「を」7080回、「に」7048回、「と」4556回、「ハ」3280回、漢字「御」2907回、「事」2848回、「玉ふ（給ふ）」1263回、「也」1109回となり、多く現れる活字はキリシタン版の日本語の文法や文体の特徴をよく反映している。以下の表は、活字の延べ使用回数とそれに該当する漢字の種類数を示したもので、延べ使用回数1回の漢字が273種類あることを示している（Table. 3）。

1回 one time	2	3	5	10～	20～	30～	50～	100～	1000～
273種類 273 types	151	185	301	276	152	166	189	250	24

Table. 3　活字の延べ使用回数と漢字の種類数の関係

Relationship between total number of characters and number of kanji types

しかし、活字印刷術は最低でも一頁（『ぎやどぺかどる』のような袋綴（用紙の中央で折って製本する）の和書では二頁分）は同時にすべての活字を並べて組版して印刷するため、少なくともそれに耐えるだけの活字は用意しなければならない。それを最低必要個数とし、本文全体で使用された回数を全体個数として、差が大きい例を比較した（Table. 4）。

活字 Movable type	最低必要個数 Minimum required	全体個数 Total number	活字	最低必要個数	全体個数
猜	5	5	と	37	4556
字	6	8	を	59	7080
麦	3	4	に	59	7048
羊	13	22	者也	9	701
恚	11	27	其	11	804

Table. 4　最低必要個数と全体個数の関係

Relationship between minimum required quantity and total quantity

全体個数では極端な違いがあるが、最低必要個数の割合は表の左側の活字で全体個数に対して高くなる。「羊」ではわずか22回の全体個数に対して13個が最低必要個数となり、全体個数701回の「者也」を最低必要個数では逆転している。このように各活字の最低必要個数を見積もることは難しい課題であり、キリシタン版の後期に印刷された本では金属活字に代えて即席の木活字を追加して埋め合わせた例が多い。

また、平仮名には書体の区別がなく、大文字と小文字の区別もない。基本となる字種も約五十種であり、表音文字であるラテンアルファベットに似通っている点では活字印刷の困難が少ないようだが、日本語の仮名表記として不自然でない水準を目指すなら、一つの仮名に複数ある変体仮名の運用と、それらの変体仮名を組み合わせて連続的に表記した連綿の実現が不可欠となり、活字の種類はアルファベットの水準を遥かに超えてしまう。漢字と仮名を混用する日本語を対象とする活字印刷の困難は想像に難くない。

4.2　正書法の限界

西洋の活字印刷がもたらした言語への影響に、正書法の確立がある。活字印刷術が生まれた15世紀までは、学術用語・書記用語としてのラテン語が学習される一方、各言語は俗語として口頭語であるに過ぎず、語の綴り方は極めて不安定だった。そのため活版印刷は正書法によって語の綴り方を統一し、これが書記言語としての各言語の地位を確立させ、国語（標準語）として成立する基盤となったことはよく知られている。

漢字はそれ自体が語であるため綴り字の問題は無いが、筆写の段階から異体字を整理し正字体を選択することが行われた。中国の唐の時代の漢字辞書『干禄字書』は官吏採用試験（科挙）の答案に書くべき正字体を定めた漢字辞書として有名だが、印刷においても正字体を選択することが一般的であり、活字であれば字体の統一は難しくない（Table. 5）。

	アルファベット Alphabet	漢字 Kanji	平仮名 Hiragana
統一を志向 （正書法） Unification (Orthography)	語の綴り方／ 異体字 Spelling Variant of characters	異体字 Variant of characters	仮名遣い Kana Usage
統一できない Disunity	—	—	変体仮名 連綿 Variant of characters Continuous notation

表5　正書法の対象

Target of orthography

平仮名は複数の文字を集めて一つの語を表すため、西洋の語の綴り方に相当するものとして仮名遣いを必要とする。英語の大母音推移が活字印刷術の普及と同時期であったため、古い綴り字が保存されて発音との不一致を生じたことはよく知られているが、日本語では仮名遣いとして、発音が変わった際にもとの綴り字を保存することが行われた。仮名遣いは書写の段階から徹底した整理が行われており、印刷においても安定した仮名遣いを踏襲することが一般的だが、正書法の意識は変体仮名の統一には及ばず、印刷に際しても同一の仮名に対応する複数の変体仮名を使い分ける必要が生じた。

嵯峨本『伊勢物語』の「よのつねの人のことも」（24丁表2行目）では、仮名「の」が三回用いられている（Figure. 9）。このように近接して同じ仮名が用いられた場合、筆写では変字法として字体を変えることが求められるため、「の」の仮名に相当する「能」「濃」「乃」の変体仮名で対応している。また、連綿表記も仮名表記にとって不可欠だが、どの仮名をどのように連綿するのかは様々な要素が複雑にかかわる問題で、この例では連綿の切れ目が「つね（常）」や「ことも（事も）」という語や文節の切れ目に対応している。連綿には、読解の可読性を向上させるという機能的な働きがある。

Figure. 9　嵯峨本伊勢物語の「の」にみられる3種の変体仮名

Variants of three characters “no” of the Tale of Ise (Sagabon)

嵯峨本『伊勢物語　上』で20回以上使用された連綿活字とその使用回数、および連綿活字内での変体仮名の組み合わせの種類数を示す（Table. 6）。

連綿 Remmen	個数 Number	種類 Type	内訳 Details
ける	105	6	介類36　介流28　介留15　希留10　遣留9　計留7
けり	92	5	介利47　気利21　遣利12　希利7　介里5
あり	48	3	安利32　阿利10　阿里6
なり	47	1	奈利47
たり	37	2	多利29　太利8
おとこ	35	2	於止己34　於登己1
なる	33	3	奈留15　奈流13　那留5
いと	30	2	以登22　以止8
とも	30	3	止毛25　登毛3　止茂2
けれ	26	3	介礼16　介連5　計連5
いひ	26	1	以比26
むかし	25	1	無可之25
この	23	3	己能9　己濃8　己乃6
なく	23	2	奈久14　那久9
より	23	2	与利22　与里1
かた	22	2	加多19　可太3
かり	22	4	加利10　可利6　閑利5　加里1
とて	22	1	止天22
けれハ	22	2	介礼八21　計連波1
いふ	20	1	以不20
おもひ	20	1	於毛比20

Table. 6　連綿活字内の変体仮名の組み合わせ

Combination of Hentaigana in continuous notation

ここに挙げた連綿活字は、『伊勢物語』を象徴する「むかし、おとこ、ありけり」という文体に対応する。文字の組み合わせは頻出する語や文節の単位に対応し、連綿の切れ目で意味が区切れるが、このことは、必ずしも連綿の切れ目が語や文節の切れ目であることを意味しない（一つの語に二つ以上の連綿活字や単独活字が対応することも多い）。

しかし、このような合理性とは対照的に、連綿活字内の変体仮名の組み合わせは多様で、使用回数が極端に少ない活字も珍しくない。どれか一つの組み合わせに統一すれば印刷の効率性は向上するが、活字版で筆写本を再現

するためには、むしろ組み合わせが多様である必要がある。その多様性は、すべての活字を平均的に使用するのではなく、使用回数に多寡があることによっても支えられている。嵯峨本『伊勢物語　上』には一回しか使用されない連綿活字も118種類あり、版面に変化をもたらして写本的な特徴をうまく再現している。

このような多様性は、連綿活字の使い方にも認められる。以下は、全体的な傾向に反して、助詞から自立語の語頭を跨ぐように連綿活字が配置された例である。

をす：夜ことに人をすへてまもらせけれハ　（人を据へて）
えう：昔おとこありけりをんなのえうましかりけるを　（をんなのえ得ましかりける）

ここでは、連綿活字の途中で区切って読まなければ誤読するため、連綿が意味の理解を妨げ、可読性という点では逆効果となる。しかし、こうした意外性は、かな書道に求められる芸術性の再現として評価できる。

変体仮名と連綿には、正書法が志向する統一性が不十分にしか関与せず、とくに芸術的な配慮のもとで書写される平仮名文には表記の統一性に逆らうような特殊で個別的な表記を好む傾向があった。そうした写本の特徴を活字版で再現した嵯峨本は、機能性と芸術性という相反する特徴を高次元で調和させており、日本の活字版の最高傑作として評価されている。ただし注意すべきことは、嵯峨本は同時代の他の活字版と比べて特殊であり、筆写された版下に基づいて量産する木版であれば、嵯峨本が到達した水準をずっと容易に達成できるという事実である。

日本の活字印刷が定着せず、写本の量産としての木版に回帰したのは、文字の種類が多いという単純な理由だけでなく、正書法による統一性に反する平仮名独特の表記法と、毛筆による書写を重視する伝統的文化が活字印刷に馴染まなかったためなのである。

5.　同一本文にみる木版と活字版

5.1　『脩華嚴奥旨妄盡還源觀』の場合

日本の印刷技術の歴史には、もう一つ特徴的なことがある。それは、江戸時代の初期と末期に、木版と活字版が共存する時代があったことである。

高山寺本『脩華嚴奥旨妄盡還源觀』（Figure. 10）（1631刊）は京都の槇尾平等心王院（現在の西明寺）で木活字を使って出版された坊刻版（寺院の出版物）であり、覆刻本が慶安3（1650）年に京都の野田弥兵衛による書肆版（出版と流通を稼業とする本屋の出版物）として出版されている。覆刻本は活字版を直接版下として用いた（活字版の印刷用紙を版木に貼り付けて彫り出した）覆刻整版なので基本的に同一の本文であり、文字の形まで忠実に彫っている。

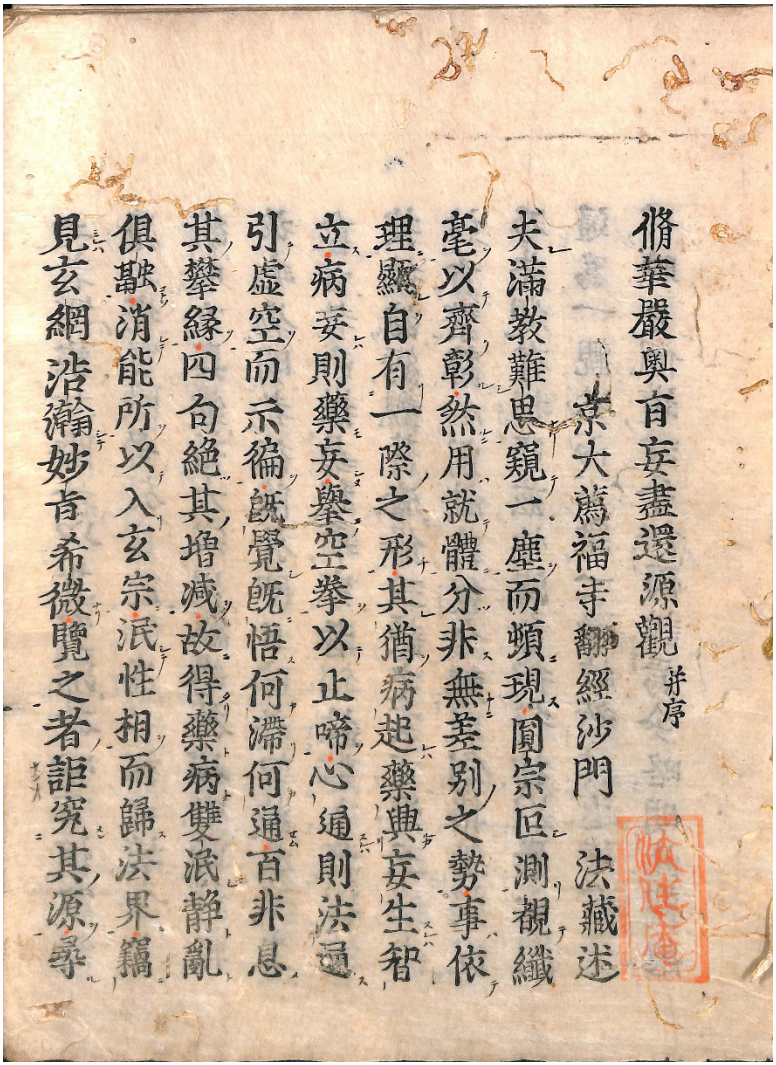

修華嚴奥旨妄盡還源觀 并序
京大薦福寺翻經沙門 法藏述
夫滿教難思窺一塵而頓現圓宗叵測覩纎
毫以齊彰然用就體分非無差別之勢事依
理顯自有一際之形其猶病起藥興妄生智
立病妄則藥妄攀空拳以止啼心通則法通
引虛空而示徧既覺既悟何滯何通百非息
其攀緣四句絶其增減故得藥病雙泯靜亂
俱融消能所以入玄宗泯性相而歸法界竊
見玄網浩瀚妙旨希微覽之者詎究其源尋

Figure. 10　脩華嚴奥旨妄盡還源觀（活字本）　Kangenkan (movable type)

活字版は本文の漢文のみを印刷するが、木版は本文だけでなく訓読注記も含めて印刷している。この理由は、木版は大量に流通するため、不特定多数の読解力の乏しい読者にも対応する必要があったためである（Table. 7）。

	同時期に出版された印刷本 Printed books at the same time	
	活字版 Movable type	木版 Woodblock
訓読注記 Japanize notes	なし No	あり Yes
出版部数 Publication number	少ない Small	多い Large
利用形態 Utilization	内部利用に限定 Restricted release	一般読者に流通 Public release
品質 Quality	きたない Bad	きれい Good
刊行目的 Purpose of publication	学術・教育的利用 Research and education	販売による利益 Sale and profit
出版までの労力 Cost of publication	少ない Light	多い Heavy

Table 7　同時期に出版された古活字版と木版の比較

Comparison between printing of movable type and woodblock

耐久性のある木版で印刷された書物は出版部数が多く、販売と流通を通して一般読者を想定している。訓読注記は片仮名（振り仮名と送り仮名）と返り点（語順を変えて読む）から構成されており、漢文（漢字）の隙間に書き込むため文字が小さく、技術的にも活字で印刷するのは困難である。そのため活字版では本文のみが印刷され、高山寺本には当時この地で活躍した僧侶、顕證（けんしょう）による訓読注記の書き込みがある。顕證のような学識者であれば全面的な訓読注記は必要無く、少部数の活字本は彼のような関係者が利用する限定的な出版としては都合が良かっただろう。他の文献を印刷するために使用した自家製の活字を再利用した出版は、活字配置の歪みにより品質が悪くなり、大量に印刷できないという欠点はあるが、効率的で無駄が無かったからである。

5.2 『兵要録』の場合

近世後期に松本藩によって出版された兵法書、御嶽神社本『兵要録』（1844刊）は活字版（近世木活字版）の藩版だが、漢文であり訓読注記を持たない。1855年に同じ松本藩が出版した木版が訓読注記を持つのは『脩華嚴奥旨妄盡還源觀』の木版と同じだが、活字版『兵要録』には数種類の異植字版（部分的に活字を入れ替えた活字版）が見つかっており、誤植の訂正や、本文校訂の結果を受けた本文の改変を行っている。

活字版では、欠落した文字を本文右側に押印して補った例すらあり、正式な印刷物ではないが、木版では正しい本文になっている。活字版は正式な出版前の仮出力用として本文の校訂を繰り返し、決定版を木版として出版したとみられる。

序文には次のような説明がある。

藩延命安元等為活版、頒藩士、奉是教者也

（我が殿様は、私（多湖安元）に命じて活字版を制作し、藩士に配布し、これを尊重して教育させるのである。）

ここに明らかなように、活字版は、藩士（地方統治組織の士族階級）に配布して藩校（学校）の教育に用いる教科書である。

一方、木版は幕府の出版許可を得た出版であることを「官許彫刻」と明記するように正式な出版物だが、跋文（編集後記）には次のような説明がある。

然而謄寫已廣、脱誤匪尠。我老侯憂之命家翁安元等校正、因活刷以頒布。今侯継厥志、欲鏤版以公於天下、臣安利等奉命、再校讎、正句讀、施訓點

（書写本が広まってはいるが、脱落や誤りが少なくない。先代の殿様はこれを残念に思い、我が一族の父（多湖安元）に本文の校訂を命令し、活字版によって配布した。今の殿様はその志を継ぎ、鏤版（木版）によって社会に公開しようと望まれたため、家臣である私（多湖安利）は下命を拝受して、再び校正を行い、句読を正確にし、訓点を施した。）

ここに宣言されているように、活字版に続いて公開を目的とする明確な意図をもって訓読注記のある木版を出版している。同一の本文をもつ木版と活字版の関係には、木版を正式な外部向け出版として、活字版を非公式な内部向けの出版として利用するという特徴がみえてくる。近世の江戸幕府による出版統制（検閲）は木版本のみを対象とし、活字版は対象外だったというが、そのことも、藩校の教科書として素早く印刷して内部で利用するためには都合が良かっただろう。

6.　まとめ

本稿の主張は以下の2つである。

1. なぜ日本で活字印刷術がすぐに定着しなかったのか。

日本語には多くの漢字があり、仮名にも変体仮名や連綿表記があるため必要となる活字を制作する手間が膨大となることが問題であった。さらに、変体仮名や連綿表記を複雑に用いる伝統的な書写文化が根強く、印刷に際しても十分に正書法が波及しなかった。写本的特徴の再現には木版の方が優れていたため、活字印刷術が定着するには障害となった。

2. なぜ木版と活字版が共存する時代が続いたのか。

近世は木版が主流の時代だが、活字版は活字を繰り返し使い、少部数で効率的な印刷が可能という特徴がある。印刷品質が木版に劣ることも私的な内部利用であれば問題にならない。それ故に、二つの印刷技術がもつ利点がうまく活用され、木版と活字版が共存する独自の印刷文化が展開した。

7. 参考文献

白井純（2008）「キリシタン版の連綿活字について」『アジア・アフリカ言語文化研究』76

白井純（2015）「松本藩版「兵要録」―活字本から整版へ―」（鈴木俊幸・山本英二編『信州松本藩崇教館と多湖文庫』新典社）

白井純（2017）「古活字本「脩華嚴奥旨妄盡還源觀」の版式について（付、影印）―活字コマの回転襲用を中心として―」（『平成二十八年度　高山寺典籍文書総合調査団　研究報告論集』高山寺典籍文書綜合調査団）

鈴木広光（2006）「嵯峨本『伊勢物語』の活字と組版」『近世文藝』84

張秀民ほか（2009）『活字印刷の文化史』勉誠出版

豊島正之（1989）「キリシタン版は何故印刷されたか」『北大国文学会創立四十周年記念　刷りものの表現と享受』北大国文学会

豊島正之編（2013）『キリシタンと出版』八木書店

中根勝（1999）『日本印刷技術史』八木書店

山田健三・伊東莉沙（2012）「烏丸本徒然草の印刷技法」『人文科学論集　文化コミュニケーション学科編』46

掲載した図版は、国立国会図書館デジタルコレクション（図1, 2, 4, 5, 8a, 9）、ブラジル国立図書館（図3）、慶應義塾メデイアセンターデジタルコレクション（図6）、小島幸枝・亀井孝解説『どちりいなきりしたん（バチカン本）』勉誠社1979（図7）、近畿大学貴重資料デジタルアーカイブ（図8b）の画像、および、高山寺所蔵本の筆者撮影画像（図10）を用いた。

Figures sources are as follows: National Diet Library Digital Collections (Fig. 1,2,4,5,8a,9), Biblioteca Nacional do Brasil (Fig. 3), Digital Collections of Keio University Libraries (Fig. 6), “Doctrina Christiana” (owned Vatican library) Benseisha facsimile edition (1979) (Fig. 7), Kindai University Rare Materials Digital Archive (Fig. 8b), and an image taken by author in Kosanji (Fig. 10).